

で一般質問といって、市長に対する質問が、21 人から、5 日間にわたって続いた。

答弁は、基本的なことを市長が、数字を含む細目を部長更には課長が答える。誰でも、最初は、何を述べたか覚えていないほど緊張する。

私も県職員時代の記憶が鮮やかに蘇る。そういえば、滝沢村の助役に就任した年(平成 4 年)の初答弁で、岩手日報に「堂々の初答弁」と書かれて冷や汗をかいたことを思い出す。



市長答弁

で、他のことを考えたりしていると、突然のように「そこで、これについては市長に聞きたい」と言われ、前段で何を言ったのか思い出せずに慌てることもある。

最終日は、夜 9 時の終了であった。議員も執行部も本当にお疲れ様でした。これで、新年度が迎えられます。

次の日は、休日。愛犬の綱を引ながら、写真のクロッカスや水仙など、春に誘われて顔を出し始めた花々をゆったりした気持ちで眺めた。

後輩の諸君のために申し上げれば、こうした答弁も、"場数を踏む"ことで、落ち着きとコクが増すものであるから、心配ない。

来年度の予算を集中審議する予算審査特別委員会も 5 日間開かれた。こちらの答弁は、主に部課長である。ということ



顔を出した
クロッカス

いわて未来研会長心象スケッチ

この心象スケッチは、主に NPO 法人いわて未来政策・政経研究会(略称: いわて未来研)会長時代に記述していることからこのような見出しとしています。本書では紙面の関係で区切りの良い第 100 号までを掲載します。なお、この号番号は市長時代からの連続番号であり、途中欠けているように見える部分は、奥州市長 3～4 年度の方で後年に著述する予定です。

平成 22 年 4 月 8 日 — 戦い済んで (第 80 号) —



先月 14 日、第 2 回奥州市長選挙が行われた。候補者 2 人が全力を挙げて戦った。

結果、残念ながら、私の落選となった。支援者が総力をあげて、取り組んだものの、私の力不足で、このような結果となった。関係の方々には、次のような文面の礼状を差し上げている。

謹啓 春暖の候ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

常日頃、大変お世話になっておりますことを深く感謝申し上げます。

また、初代奥州市長としての四年間、公私にわたり、ご指導・ご支援賜りましたことにつきまして、心から御礼申し上げます。

ことにも先の奥州市長選挙(平成 22 年 3 月 14 日投票)におきましては、格別のご支援・ご高配を賜り、深く感謝申し上げます。

雪の中のあいさつ回り、寒い夜半の地域懇談会などで、他の用務を後回しにされて、日夜、応援いただきましたことが、つい昨日のように思い起こされます。

私と致しましては、現職としての実績と



新マニフェストによる政策を掲げ、後援会を始めとする皆様方の熱気溢れる絶大なご支援、ご教導を力として、妻美智子ともども、全身全霊を上げて、戦い抜いた思いです。

しかし、戦い利あらず、私の力不足のため、敗北のやむなきに至りました。

ご支援いただきました皆様に衷心よりお詫び申し上げますとともに、心から御礼申し上げます。

振り返りまして、初代奥州市長として、思う存分の働きをさせていただき、合併新市の基礎固めの実績を残すことができましたことに、深く感謝申し上げます。

今後につきましては、これまでの市長職等の経験やこの度の選挙戦を始めとして、いただきました熱いご支援の輪を生かし、大切にさせていただくことを基本としたいと考えております。

国や地域の明日を想い、その限らない発展を願い、また、お世話になりました皆様方へのご恩返しにも繋がればと思い、私なりに、政策研究・提言や次代を担う人材育成などに微力を尽くして参る所存でございます。

何卒、変わらないご高配ご支援を賜りますよう、伏してお願い申し上げます。

なお、諸般の事情から、ご挨拶が遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

末筆ながら貴台の益々のご健勝とご発展を心からお祈り申し上げ、御礼のご挨拶といたします。

謹白

この度の戦いで、私の選挙戦は2勝1敗となった。人生最大級の戦いでもある。何よりも多くの方々の命がけのご支援に深く感謝しなければならない。

総括的な感想はとても言い尽くせるものではない。後年、著作にまとめられればと思う。

平成 22 年 5 月 28 日
— 東下り (第 81 号) —



今年も我が家の近くに、華麗にアヤメが咲いた。隣家の花は、とりわけ美しい。牽牛の前に、年に一度の織姫が舞い降りたようでもある。

タイトルの東下りは、平泉の代表的な祭り「義経公の東下り」のことではない。伊勢物語(900 年代)第九段の「東下り」である。

昔、ある男が都での生活に絶望して、友人と東国に下った。途中、三河の国、八橋で美しく咲いている「かきつばた」を題にして、京に残してきた妻への思慕の情を詠んだ。

かきつばた(杜若)はあやめ科の多年草で水辺に咲く。写真のアヤメとは異なるが、似ており、十分連想させる。

物語は、実に優雅で、知性に溢れている。「かきつばた」という五つの文字を句の始めに置いて、旅の心を詠んでほしいといわれ、歌を作ったというのである。

「から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思う」と詠んだ。

からごろも(唐衣)のき(着)なれたように、慣れ親しんだつま(妻)が都にいますので、はるばるとやってきたたび(旅)をしみじみと悲しく思うという歌である。

それを聞いた人々は、みな「ほしいい(乾飯)」の上に涙を落とし、そのためにほしいいが、ふやけてしまったと言うのである。

ロマンあり、克明な描写あり、傑作の一節と思う。この歌は、学生の頃、覚えたきり、忘れたことがない。お陰さまで、毎年思い出す機会にも恵まれている。

この世がいやになることもある。旅に出たくもなろう。また、旅先で、古女房を思い出すこともあろう？

ただし、この最後の点は、逆にこの際忘れたい向きもあろうが、諸兄は

この古典に見習うべきである !?

なんとも深い味わいがある。

「妻の足 大きく見えし 今朝の秋」とは、私(江山)の駄句である。レベルも深みも比較すべくもないが、時に、古女房を文学の世界に登場させる点では、共通しているかもしれない。

平成 22 年 8 月 28 日

— 松下政経塾訪問記 (第 82 号) —



松下政経塾正門にて アーチ門での説明風景



松下幸之助書

「素直」

8 月 26 日(木)に天下に名高い「松下政経塾」の日帰り見学会があった。神奈川県茅ヶ崎市市内にあるが、JR 東海道線の辻堂駅からバスで 10 分ほどの距離にある。

現在、私が会長を勤めさせていただいている「いわて未来政策・政経研究会(略称:いわて未来研)」では、来年度の目玉事業として、「いわて平成松下村塾(仮称)」を立ち上げ、若手政治家等の養成を目指している。その参考として見学会に参加したものである。

松下幸之助氏が、私財 70 億円とグループ企業からの 50 億円を併せて 120 億円の寄附を行い、昭和 55 年に実現した。2 ヘクタールの土地と 6,700 m²の建物を有し、全寮制で 3 年間(設立当初は、5 年間)の教育を行ってきた。

これまでの卒業生は、242 名であるが、国会議員 34 名、地方議員 26 名、首長 11 名など多くの政治家を輩出してきた。



2011(H23)7.10 いわて平成
松下村塾入塾式

松下幸之助翁の定めた塾是、塾訓、五誓を基にした人間教育と塾生同士の討論、現場調査などの塾生同士の切磋琢磨が特長であり、座学は、全体の約半分と言う。

塾是等を紹介しよう。

塾是 「真に国家と国民を愛し、新しい人間観に基づく
政治・経営の理念を探求し、人類の繁栄幸福と世界
の平和に貢献しよう。」

塾訓 「素直な心で衆知を集め、自修自得で事の本質を
究め、日に新たな生成発展の道を求めよう。」

五誓 「一、素志貫徹の事 一、自主自立の事 一、万
事研修の事 一、先駆開拓の事 一、感謝協力の
事

ところで、この塾を幸之助翁が情熱的にスタートさせたのは、85 歳の時であった。94 歳で没するまで、この塾に泊りがけで訪れ、講話したと言う。上の写真の「素直」は、同翁が泊まっていた茶室の床の間に掲げてあるものである。

人間、一生の仕事は、遅すぎるということはない。また、最後の仕事は、人を育てることである。

そのように感じた一日であった。

平成 24 年 11 月 11 日 — 石の履歴書（第 83 号） —



太陽と風の家鉱物展示室



パンフレット

11 月 11 日一関市東山町にある「石と賢治のミュージアム」を訪ねた。

友人の絵画・写真作品展と同時開催の音楽家(エレクトリックベースト)ライブを楽しむためである。

このミュージアムは、宮沢賢治(明治 29 年～昭和 8 年)が昭和 6 年の春から東北砕石工場の技師として働いたことを記念して同工場跡地に一群の施設として創られたものである。

賢治が最後に社会に出て働いた場所であり、彼らしく農村の困窮を救うためには石灰によって土壌を改良しなければとの熱い思いを持ち、病に倒れるまで奮闘していたことを知り感慨深かった。

有名な「雨ニモマケズ」はこの場所で生まれたという。

写真の展示室には、石ッコ賢さんにちなんだ鉱物が名前入りで綺羅星のように陳列されている。この石はどこで採れてどんな素性であり、名は何というといった具合である。

数日前、自宅付近を散歩していた時のことである。

歩道にピンポン玉ぐらいの何のヘンテツもない石が転がっていた。いつもと違って何となく気になった。この石はどこから来たのだろうか。何年かかってどう歩んできたのだろうか。それを誰も聞いてくれないことを悲しんでいるのだろうか。

考えて見れば、木や草や土ならもともとその場にいた(あった)ことがわかるし、価値のある財物ならば由来や動きの経過は知られることになる。

常に身近にあり、いざというときお世話にもなるのに、石(石ころ)だけが履歴不明のまま放置されているのではないか。

何か不当な扱いのように思えてきた。

そんな想いで見ると上記の展示石は石の中の貴族のようなものだ。氏素性がはっきり位置づけられ、粗略に扱われることがない。

しかし、庶民石にもなにか名前をつけて認識してあげられないものか。

ふとそう思った。

石ッコ賢さんなら何と言うだろうか。

平成 25 年 8 月 8 日
— 語りかける作家（第 84 号） —



いわて未来
研会報



塩野七生氏

特定非営利活動法人(NPO 法人)いわて未来政策・政経研究会という団体がある。会員はおよそ 3 百人で年 4 回会報(カラー16 ページ)を発行しており、その編集作業は唯一の常勤である会長(私)が行っている。

平成 25 年 7 月 30 日発行の会報第 13 号の編集後記(あとがき)に次のように記した。

『ローマ人の物語』はお読みにになりましたか。作者の塩野七生(ななみ)さんは、私が密かに司馬遼太郎クラスと敬愛している作家です。その本の中で、『年齢が人を頑固にするのではなく、成功体験が人を頑固にする』と述べています。

状況が変革を必要とするようになって、成功によって得た自信が別の道を選ばせることを邪魔するということのようです。



司馬遼太郎氏

今次の参議院選挙で盛り上がった政治においても、また当会のような NPO 活動にも、無論、個人の世界にも当てはまるのでしょうか。いかにして虚心坦懐となり得るか、団扇を片手に考え込んでしまいました。コレ編集の反省の弁 ！？ (相原)」

お二人の作家は私たちに語りかけ、問い掛け、考えさせてくれる。作家本人の深い洞察力を通して、歴史の真実と重みそしてそこから導き出される教訓を示してくれる。

このような先導者こそ人を育て、世の向かうべき方向を誤りなく示してくれると感ずる。

私も著述を重ねる中で、この両巨頭をはるか後方からにはなろうが追走したいと思っている。それが夢のライフワークなどと気負っている。

平成 28 年 6 月 8 日
— クルミありがとう (第 85 号) —



平成 28 年 4 月 27 日 (水) 午後 5 時 5 分我が家の愛犬クルミが逝った。平成 14 年 11 月 9 日生まれであるから享年 13 歳である。人間の年齢に換算するとおよそ 70 歳くらいだと思う。

もう少し長生きしても良かった。子宮に膿が溜まる病があり、高齢のため手術もできないでいた。何より大好きな餌を口にしなくなって約 1 週間、苦しい息遣いをするようになって約 3 日で昇天してしまった。体を撫でながら名前を呼ぶくらいのことしかできなかった。



コーギー犬の雌で、盛岡にいる二男坊が大枚をはたいて衝動買いした犬であった。6 年ほど室内犬として飼われ、様々な事情で江刺の我が家に引き取られたのであった。クルミという名はその息子がかつて飼育していたウサギのミルクという名を逆様にしたものという。クルミにとってはこの二男坊こそが親そのものであった。彼は、亡くなった日にたまたま仕事のついでに立ち寄ってくれ、苦しみにあえいでいるクルミを愛撫していった。

クルミはこれに安堵したかのようにほぼ直後に崩れ落ちるように倒れ、逝去した。

我が家の 4 人 (両親、妻、私) は、犬を飼った経験がなかったが、たちまちその愛くるしさに魅了されてしまった。父は朝の散歩と朝食、母は夕食、妻は夕方の散歩、私は補完役をそれぞれ担当した。犬と私の 10 の約束という本も読み、声をかけ、話しかけながら接した。悩み事を抱えて 30 分ほど散歩するときは、実際に声を出さないまでもクルミに聞き役になってもらっていた。腹を撫でてもらうのが好きで、庭で声をかけるとポンと腹をこちらに向けて寝ころんだものだ。

我が家の廊下に長男の家族が孫 3 人を連れて熊本から泊まりに来た時の写真、同様に二男の家族が盛岡から孫 2 人を連れて遊びに来た時の写真が

たくさん飾ってあるが、その集合写真のほとんどすべてにクルミが映っている。孫寄せの切り札でもあった。

クルミが亡くなった次の日、火葬場で骨を拾い、我が家の菩提寺でもある西念寺のペット共同墓地に納骨し、「愛犬相原クルミ」のプレートもつけていただいた。母屋の車庫内の犬小屋にはクルミの写真を飾り、遺品を中に入れている。



西念寺のペット共同
墓地にクルミの遺骨
を納骨(父と私)

家族全員が喪失感に包まれている。盛岡の二男坊は電話で訃報を聞いて孫娘とともに声を上げて泣いたという。

クルミ、本当にありがとう。私がやがてそちらに行ったなら、三途の川付近で呼ぶから待っていてほしい。

平成 31 年 4 月 30 日 — 母も歩いた道 (第 86 号) —



国道 397 号線の奥州市胆沢分に母ミツ(92 歳)が水沢女学校時代に毎日歩いて通った道がある。母の実家である胆沢若柳字島塚から同女学校のある水沢吉小路付近(現在の奥州市役所近く)までの道のり約 6.3 キロ(片道)である。

母の話では、天候の悪いときはバス賃をもらえたが、あとは歩くほかなかったとのこと。

私の子供時代は、母の実家にあまり年の変わらない従兄弟姉妹がいたこともあり、泊りがけで行くのが楽しみで、バスに飛び乗ったものである。降りる地点のバス停の名が「田中前」であり、現在もそのままであることが

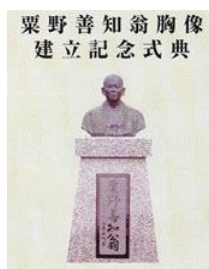
懐かしく、また嬉しい。

この途上の実家から 1.6 キロほどのところが延喜式内神社止止井(とどい)神社跡地となっており、そこに大きな松の古木があり、頭上高く道路にせり出している。たとえば、古(いにしえ)より旅人にとっては日よけになり、雨宿りにもなったであろうと想像させるたたずまいである。奥州市長時代に何度も公用車でこの道を通ったが、「あるいは昔、母もこの松を毎日見ながら学校に通ったのではないか」などと思うと、何やら懐かしさがこみ上げてきたものだ。

この地点から約1キロほど水沢方面寄りの397号線沿いの小公園地内に、私が奥州市長時代に揮毫を依頼され、「栗野善知翁」と記した郷土の偉人の胸像が立っている。この揮毫のお手本は当時書道教室を開いていた母ミツの書である。ここもまた、母の面影が自然に表れる場所である。

このようにこの路線地区は、母とのかかわりでとてもゆかしいものであるが、その母は現在 92 歳で、5 年ほど前に脳梗塞で倒れ、それ以来会話もできず、食べることもできず、寝たきりで胃ろう措置の人である。しかし、容体は安定し顔色もよく、ある意味では大変丈夫でもある。女学校時代にこの道を歩いて通ったことが母を丈夫にしたのではないかと感ずる。

母の歩いた道への想いは尽きることがない。



令和元年 8 月 31 日
— 父は文学者 ? (第 87 号) —



父正毅・母ミツの結婚記念写真



著書「米寿のあゆみ」

父相原正毅(せいき)は、大正 10 年 9 月 14 日生まれで、満 97 歳である。自宅で妻ミツ(92 歳。寝たきり)と息子夫婦(正明・美智子)と暮らし、足腰が大分弱り、年相応の物忘れもあるもののすこぶる元気である。血液検査等に基づく健康診断でも特に悪い数字はなく、どうやら血管年齢も若いようである。

若いころから早寝早起きで、「身体を動かすことが大事」が口癖のような人で、八十代も日々実践していた。健康保持のために誠に良い習慣であったと思う。

もう一つ素晴らしい習慣があった。それは物書きである。このことが家族にも分かったのは、65 歳になった時に初出版した「わが来し方わが出会い」(昭和 61 年)からである。

その後、地域の習俗を現した田谷老人クラブ発行の「田谷の婚礼と葬儀の昔物語」(平成 5 年)、田谷戦争体験記



高校入学時(1963 年)の家族写真
(父正毅、母ミツ、妹博子と)

を作る会名で出した「あの時の思い出ー戦争とその前後ー」(平成 7 年)、県獣医師会水沢支会 OB の面々の随筆をまとめた「亀の甲の呟き」(平成 10 年)、身内にのみ配布した「わが陸軍記」(平成 13 年)などを発表している。

さらに、13 年余にわたり自宅のある橋本部落(34 世帯)のことをミニ新聞風に記して配った”橋本だより”を本にまとめた「橋本の今昔」(平成 17

年)、そして集大成とも言える満 88 歳の叙勲受章時に出版し配付した「米寿のあゆみ」(平成 21 年)である。

相原家にとっても地域にとってもひとつの歴史書として燦然と光を放つものと感じ、信じている。

ところで、「米寿のあゆみ」の中に「小さな二人旅」の項がある。父正毅と母ミツが新婚間もない頃に、二人で往復 40 キロもの道をそれぞれ約 10 キロの男爵薯が入ったリュックサックを背負いながら歩いたくだりである。NHK の自分史講座の機関誌「自画像」に掲載されたものでもある。若い頃短歌も多少嗜んだらしい父であるが、次の文を読むたびに「父は文学者 ? 」と感ずるのである。

「(前略)このころからリュックサックがずっしりと肩にくいこみ、足取りも重くなり始めるのだった。金ヶ崎橋を渡り一休みすることにし、北上川の堤防に腰を下ろした。

洋々と流れる大河北上川の川面に、一陣の風が吹き抜け、名も知らない可憐な花がたなびき、美しい風景だった。

(中略)あのころの情景が、今も鮮明に思い出され、『あれが新婚旅行だったのかなあ』と懐かしさがこみ上げてくる。」

令和 2 年 8 月 31 日 — 孫とツバメ (第 88 号) —



孫(熊本 2、盛岡 2)



ツバメと巣

私は、小学校 4 年くらいまでは祖父母と同じ部屋で寝ており(父母と妹は別室)、祖父母をもう一組の父母のように感じていた。

今度は、自分が祖父母の立場になると、実はこんなにも可愛いと感じて

いたのかと思い、改めて祖父母を想い、感謝した。

ところで今の孫である。2 日もいれば身体も財布もくたくたになってしまう。それでも今度はいつ来るのかと首を長くして待っている。年寄ばかりの家になってどこか寂しいので、玄関の靴置き場には孫用のカラフルなスリッパを常に置いている。家の廊下には孫を真ん中に据えた集合写真が撮影時期順に所狭しと貼られており、書斎には孫のご真筆(手紙など)やら絵が掲げられている。

孫とは、神様が長い人生の褒美に年寄りの元気づけとして恵んでくれるものであるらしい。感謝 !!

もう一つ同じくらいに可愛くて待ち焦がれる相手が現れた。2～3 年前から我が家の棟続きの車庫に現れ始めたツバメである。昨年までは巣を完成させないまま、1 ヶ月もしない内に姿を消していた。ところが今年の 5 月初めに現れたツバメ(雄)は、毎日通って巣づくりを続け、5 月の内には完成させてしまった。ただし、小ぶりなのが気がかりであったが、ともかく雌を呼び寄せる環境を整えたのだ。それからは巣の側か我が家のすぐ近くの電線に止まって「ジージー」(偶然孫が自分と呼ぶ「ジジ」に似ている)といった甲高い声で鳴き出した。

ところが伴侶はなかなか現れない。すべて見ている訳ではないが、1 度だけ来た雌が巣を品定めしたような素振りで間もなく姿を消した。「こんな小さい巣では無理だわ。それに近くの木にカラス(ツバメの天敵)の巣があるじゃないの」と言ったような気がした。子育ては5月と7月の2回のチャンスと聞くのでヤキモキしていたが遂に7月も過ぎた。ふて腐れたかのごとくその後は鳴かなくなってしまった。

そして我が家の初盆が過ぎた8月16日を最後に姿を見せなくなった。私はあの「岸壁の母」の歌(終戦直後に戦地から復員する我が子を待つ母)の母のように日々虚しく車庫のツバメの定位置付近を眺めるばかりであった。

途中まで読み進めていた「ツバメのひみつ」の本も手元から遠ざかった。

ツバメは縁起もの(「ツバメが来る家は商売繁盛する」)と言われるが、私にとっては、孫と同様に天からの贈り物である。

令和2年9月30日

— 新首相誕生に際して思ったこと (第89号) —



菅義偉新首相



毛沢東

新首相菅義偉氏が総裁選最有力候補として急浮上した際、本人の人となりに関する様々なエピソードが報じられた。

まずは小此木彦三郎衆議院議員の秘書時代の話。11年間誰よりも早く出て、誰よりも遅く帰ってという風に献身的に尽力したとのこと。

そして安倍内閣の官房長官としての7年8ヵ月では、毎日2回の記者会見を欠かさず、危機管理のためにほとんど自宅に帰らず、趣味の散歩の際も急な呼び出しに備えて背広姿で歩いたとのこと。

私はこの話を聞いて、この人は仕える相手が自分をどうしても必要と思えるように全身全霊を注いだに違いない、それが結果として本人を大きく育て上げ、持ち上げることに繋がったと感じた。安倍首相にとっては、手放せない、「必要な人材」であったと思う。

「毛沢東の私生活」という本がある。中国の毛沢東主席の侍医として約22年間にわたり、ほぼ毎日24時間側に仕えた李志綏(リ・チスイ)が後年アメリカに移住後著した本である。それによると毛の人の使い方は次のようであった。

- ① 絶対服従でなければ放逐した。失脚しなかった周恩来(首相)は実は絶対服従者であった。
- ② 問題があろうとも役に立つと思えば側に置き、逆にいくら功績があったとしてもその思いがなくなればいとも簡単に放逐した。

かつて大きな組織のトップであったA氏に、その後任者であるB氏が尋

ねた。「あなたが長年重用してきた C 氏はどういう点が優れているのか」と。A 氏は「便利だから」と答えたという。私はこの 3 氏とも知っているが、この話を聞いた時、本音の話としても何とも寂しい話と感じたものである。

上司にとって必要な人材、身近におきたい人材とは、優秀、人柄、将来の人材というのは一つの要素であり、本音ベースでは「自分の役に立つから」であるらしい。

令和 2 年 10 月 31 日

— 先達はあらまほしき（第 90 号） —

令和 2 年 10 月 9 日(金)、好天の中、NPO 法人いわて未来研の会員等親睦交流事業が花巻市東和町で行われた。私は、同法人の会長であるが、実際には常勤役員として事務局長の役割を担っており、場所を選定するとともに 2 ヶ月余前には妻と観光も兼ねて下見をしていた。



三熊野神社の境内で

ここ東和町は、元人口 1 万人余の独立した自治体であったが、平成の大合併で花巻市と一緒にになったものである。私としては県庁時代に親しんだ東和町であり、江刺市時代は隣町で、そこを再び訪れたような感覚であった。

最初の成島毘沙門堂は全国泣き相撲大会でも知られる三熊野神社の境内付近にあり、国指定重要文化財である兜跋毘沙門天立像が安置されている。1 人 500 円の拝観料にふさわしい佇まいであった。あの坂上田村麻呂の開基とも伝えられる。深い歴史の圧力で押しつぶされそうになる。

次に東和温泉に向かう。元来、北上山系には温泉は出ないといわれていたが、ふるさと創生事業による各自治体への 1 億円の交付金で東和町の中

心部に程近い場所に温泉を掘り当て、北上山系初の温泉となった、著名な温泉である。今回は入湯の時間は取らず昼食会場となった。

萬鉄五郎記念美術館(市立)では東和町出身の萬鉄五郎の人物と作品について学芸員が予定した1時間すべてを使って歩きながら説明してくれた。十分理解したかは別としてあっという間の充実した時間であった。

最後は日本ホームスパン工場の見学である。ホームスパンの歴史は古く、明治の日露戦争期に極寒のシベリアへ出兵した日本兵を寒さから守るために、農商務省がイギリスよりめん羊を輸入するとともにスコットランドのホームスパン技術を導入した。その際日本の中で涼しく湿度の低い北海道・岩手・長野の農家に産業として推奨した。

その後ホームスパンは衰退していくが、岩手の地では、この東和町ほか少数の地域で有名ブランドとの提携などで命脈を保ってきた。貴重な地場産業として応援したいものである。



ホームスパン工場で

ところで私はホームスパンのジャケットを3着も持っていないながら、この場に着て行かなかった(同行の妻は着用していた!)。親切にご案内いただいた会社役員のKさんにそのことを釈明し詫びたところであった。

充実した東和の旅となったが、やはり花巻観光協会から派遣された花巻おもてなし観光ガイドのTさんのリードに助けられた。成島毘沙門堂では予想外に視察が早く終わり、40~50分も時間が余ると困ってしまったとき、すかさずすぐ近くの和紙工芸館の見学を薦めてくれ、形がついた。美術館では予めのアドバイスにより、学芸員の説明案内を導き、素人でも分かりやすい、時間が短く感ずるほどの良い見学となった。

ふと私が愛読する徒然草(吉田兼好)の一節、「少しのことに、先達はあらまほしき事なり」を思い出したところであった。

令和 2 年 11 月 30 日

— コロナ禍に立ち向かった創立十周年記念式典(第 91 号) —



記念式典



記念講演会



記念食卓会

師走間近の令和 2 年 11 月 28 日(土)、奥州市水沢のプラザイン水沢でい
わて未来研創立十周年記念式典が行われた。およそ 30 人の出席のもと、会
長の私は、万感の想いで式辞を述べた。幾度も検討し、朗読してみて迫力
のないところを耳に届きやすいように修正し、最後は巻紙ならぬ折り畳み
紙スタイルに作成したものである。両手でアコーディオンを広げる如くに
開きながら、ゆっくりと朗読した。

市長退任後に 239 人の応援団に励まされて立ち上げ、社長、幹部、中間
管理職、イチ営業マン、イチ会計係、イチ事務員と一人何役も兼ねて、い
わば無遅刻・無欠勤・残業多々でひた走った十年であった。

式辞でも触れたが、この間年 4 回の会報は一度も休まず、他の事業も基
本的に全て計画通りに達成した。この間の会員数は発足時の 239 人を常に
上回って推移し、財務会計も繰越金を 2 百万円余積み立てることが出来た。

自分自身の区切りのためにも何としてもオーソドックスにきちんと開催
し、成功させたかった。3 ヶ月近くかかって合計 44 人に対する感謝状・表
彰状も作成完了し、NPO 法人の監督者でもある奥州市長(小沢昌記氏)の本
人出席も直接に電話依頼することにより実現した。

残る課題は、新型コロナウイルス感染拡大対策であった。10 月 30 日発
行の会報でこのことをいかに構築しながら参加を呼びかけるかが大きな関
門であった。

基本は次のとおり。無論、会場のホテル側の理解・協力の下である。

- ① 検温の上マスク着用、手指消毒で入場

※ 発熱(37.5 度以上)の方は参加を見合せ頂く。

② 座席は、教室式配置のテーブルに隣同士が 1m の間隔で着席

③ 演壇付近にアクリル板設置、マイクはその都度消毒

最も注意を要する食事会では更に次を加える。

① 食事会開会前にマスク着用での交流タイムを設ける。

② 座席はテーブルをコの字型に配置し、席同士は 1m の距離を取る。

③ 開始後は、会話は控え目にして頂き、司会の指名により壇上で順次行われる挨拶や自己紹介等を聞きながら食事をして頂く。

ホテル側の洗練された対処もあり、予定通りスムーズに進行した。山本講師からは、後日のメールで「感染症対策をされ、いろいろ工夫し、ご配慮され、素晴らしい十周年記念の会だったと、帰って来てつくづく思っております」とのご感想をいただいた。

地元 3 紙のいわば好意的報道もあり、ここに大事業創立十周年記念式典が遂に、無事終了したのであった。



記念式典(右端は当会看板)



小沢奥州市長に感謝状贈呈

令和 2 年 12 月 31 日

— 近年まれに見る大雪と父の一周忌 (第 92 号) —



お墓への通路



法 要

令和2年12月14日から連日の大雪となった。50センチくらいの積雪が3日も連続した。これまでも1日ぐらいの大雪はあったかも知れないが、一度雪かきをすればしばらくは小康状態が続いたものである。しかし今回は違った。あつという間に1メートル以上も積み重なってしまった。

我が家の門口から玄関まで、そして車数台分の駐車場スペース、さらには常に使用する冷蔵庫のある古い蔵まで、妻と2人だけで2日ばかりでなんとか除雪した。その間にも除雪車が通るたびに山のようなしかも硬い雪の塊を門口を塞ぐように置いてゆかれることへの対処に追われた。もう限界と思った時に、とんでもないことを思い出した。

実は、12月20日に近くのお寺(西念寺)で、父故正毅の一周忌法要と墓参があったのである。他の準備は万端でも除雪のことまでは全く考えていなかった。

ようやく雪が小止みになった前日(12月19日)の午前に、妻と2人で雪かき道具を持って車で寺に乗り込んだ。寺の広大な駐車場についても一応心配したが、幸い最小限の除雪は行われ、その日も何かの行事で10台ほどの車が止まっていた。我が家の行事のある翌日の駐車についてもなんとかなりそうな雰囲気であり、ホッとした。

問題は、寺の本堂から我が家の墓地までの通路である。恐る恐る見ると、本堂の周囲は流石に歩けるものの、墓地群の広いスペースはお墓も通路も1メートル以上の雪にスッポリ埋まって静まり返っていた。本堂周りの通路から我が家の墓所まで、20メートルはあろうか。一瞬「大雪のため法要のみで墓参は取りやめで良いのでないか」との声が聞こえた気がした。しかし、文書でご案内もしており、何とかすべきでないかとの声が強まった。

背景として、もともとの案内は、法要墓参後にホテルで会食の予定であったものが、新型コロナウイルスの感染が岩手県内でも拡大しつつある情勢となったため、綿密な感染予防対策を講じてはいたものの、取りやめやむなしとして、その旨の変更連絡をしたばかりでもあった。墓参ぐらいは何とかやり遂げたいとの思いがあった。

70代の私と60代の妻2人で、とにかく始めた。やはり墓地ならではの

ハードルがあった。掘った雪を隣にポイと放れないのだ。他人の家屋敷に道路の雪を投げ入れるようなものだ。やむを得ずゴキブリ行動を取った。ワザワザ本堂付近まで戻って雪を捨てる他はない。悪戦苦闘 2 時間ほどでようやく我が家の墓所にたどり着いた。それから 1 時間ほどで墓石の周りの雪も取り除き、何とかかろうじて墓参できる道筋が見えた。ここでグロッキー気味の妻も見て、終了とし、午後に私だけ仕上げ作業に出向くことにした。

昼食休憩後の午後 2 時頃、今度は私一人でまだまだ歩きにくい通路の雪かきを始めた。ぞろぞろと歩いた時に転びそうな箇所、先に焼香の終わった人々が待機する空間などをゆっくりと掻いた。

この作業はどうしても祖父母や父の眠るお墓の前が中心となったが、故人の顔を思い浮かべるうち、この家族に褒めてもらいたくて一生懸命作業しているような気持ちになった。昔子供時代に家族に聞こえるように大きな声で教科書を読み、後で家族に勉強していると褒めてもらおうとしたあの心理である。思わず懐かしく思い出した。2 時間ほどで終了。

翌本番の日は天気も良く、法要後の墓参は、上の写真の通路を通してスムーズに終了したことであった。

令和 3 年 1 月 31 日

— 岩手県庁は我が人生の実家 (第 93 号) —



いわて未来研究会報第 43 号 (R3. 2. 5) の表紙から 岩手県庁(本庁舎)

2021(令和 3)年 1 月 15 日、いわて未来研究会報第 43 号 (R3. 2. 5 発行) のテ

一マの一つである女性活躍推進について取材するために久しぶりに岩手県庁(本庁舎)に足を踏み入れた。目的地の環境生活部長室と若者女性協働推進室は 11 階にある。とても懐かしいフロアである。

今から 51 年前の 1970(昭和 45)年 4 月某日、新採用職員の私は、これから所属することになる企画部企画調整課のある 11 階のエレベーターホールに立っていた。隣には同課の A 課長補佐がおり、新人の私を関係のところに挨拶させるべく引率していたのであった。ホールでエレベーターを待つうち、A 氏から「だんだんには経済のことも勉強してもらわなければならない」といったことを言われ(自分は法学部の出身)、期待されて嬉しいような、それにしても大変そうだといい心地になったことを記憶する。それから 33 年半の県職員生活のうち、この庁舎では 30 年過ごしたことになる。フロアでいうと、3 階に 6 年、5 階に 5 年半、6 階に 3 年、8 階に 5 年半、10 階に 7 年、11 階に 3 年といった具合である。

ここで社会人としての初めての出会いがあり、上司・先輩からの躰があり、仕事に夢中になり、夜の酒席での鍛え方あり、毎年の人事に緊張し、議会对策に走り回り、健康のため 1 階あたり 10 段の階段を毎朝 10 階まで歩いて上がり、喜怒も哀楽も全てが詰まり凝縮された空間であった。

自分の能力を育て、開花させ、自らの人生と運命を切り拓いたところは、この県庁の他にはないと言っても過言ではない。

年度末恒例の退職幹部職員の庁舎前での見送りの際、教育長で終えられた N 氏が大量の職員の前で、県庁舎の 12 階までを見上げながら、叫ぶように「私はこの県庁が好きだ」と言ったのを鮮明に覚えている。気持ちがよくわかり、自分も同じと思った。

この岩手県庁舎は、1965 年(昭和 40 年)4 月 30 日に完成し、岩手県内はおろか東北地方でも最も高層のビルとして建てられものである。その 5 年後に職員となった私は、まだピカピカした庁舎を密かに誇りに思ったもののだが、50 年余経た今日も厳然と変わらずに存在しているのは嬉しい。毎日お昼時に世話になり、ささやかな社交の場でもあった地下 1 階の生協食堂が今も賑わっているのも有り難い。

ところで実家とは自分の生まれた家や嫁ぐ前の元の家を指す言葉であるが、岩手県庁はまさに我が人生の実家であり、それが建物も元のままというのは一段と幸せなことである。

こんなことを思いながら楽しい取材のひとつを過ごしたのであった。

令和3年2月28日 — 俳句を始めた頃（第94号）—

私は現在岩手県俳人協会の会員である。毎年度の同協会会員作品集には、俳号「江山」と「平3 樹氷入会。平6 樹氷新人賞。平7 樹氷同人。平8 岩手県俳人協会会員」と表示される。

平成14年に県庁を中途退職し、江刺市長選挙に向けて準備を始めた際のリーフレット趣味の欄には、「囲碁、俳句、ゴルフ」と記載している。



平6 樹氷新人賞



俳句名刺

俳句を始めたきっかけは何であったろうか。不惑の年(満40歳)を迎えたとき、何か後年のために残したい、自分に合っているものは文字で残すことだと考えた。国語の世界では短歌が好きで、大学教養部でも古典を選択し、和歌の講義を心に染みるように学ぶことができた。そこで最初短歌を考えた。私の父も若い頃短歌を嗜んだと聞いていた。しかし、検討するうち短歌は心情を吐露し過ぎてしまい、現職の公務員には向かないような気がしてきた。俳句ならその懸念がほぼないし、霞が関の中央官僚が楽しん

でいる話も伝え聞いている。そこで俳句と決定。

新聞の俳句欄にハガキで投句しながら、選者である小原啄葉氏に宛て、俳句を学ぶ場はないかと書き添えた。同氏はかつて県の部長まで勤めた方で県俳壇の第一人者である。早速こういう句会があるので参加してみてはどうかとの連絡があった。間もなくの休日、盛岡市内の公民館の一室に向いてみると、小原啄葉先生を中心にしてほぼ中年以上の十数人が参加しており男性は3人のみであった。確か一人5句を出し、互いに良いと思う句を数句選び合い、最後に先生が選んだ句が発表される。緊張の中、初めて選ばれた(先生)句は、次の句。

のうぜんの朽ちたるもあり垣の下 (注:のうぜんはノウゼンカズラ)

この頃、県本庁の医務課で課長補佐(医療担当)をしており、激務でもあったが、月1回の休日句会にできるだけ出席するようにした。無論そのために句作りをし、自ら良いと思う句を選んで当日持参しなければならない。

ここで大いに迷いが生ずる。句会に出る以上は何句か拾ってもらいたい、そのためにはこんな風にひねって印象深くなるように作ってはどうかとといった風にである。ところが何回も句会に通っての感想は、「見てくれ俳句」は全滅で、何気なく無意識的に作ったものの方が拾われるということである。たとえば、自分としては、数合わせに付け加えただけの次の句が面白いと評価された。

セスナ機もトンボも同じ方へ飛び

その後県の課長となってからは更に多忙を極め、句会に出ることは叶わなくなり、自己流的にたまに句を作っては所属俳誌の樹氷に投句する程度となった。また、評価された句を数句集めて俳句名刺を作り、話題作りのための材料とし、大いに役立ったものだった。

時は流れ、市長職となったときは、俳句もできる首長として句会の選者に祭り上げられたこともあった。今はインターネット句会に月3句投句し、採り上げられた句を集めて年1回の県俳人協会への提出句10句(これはそのまま掲載される)としているのみである。

おそらくこんなペースで終生細く長くお付き合いすることになると思う。

囲碁とともに頭脳老化防止の最善策として。

令和 3 年 3 月 31 日 — 祖父相原藤治郎への手紙（第 95 号） —

昼食休憩時に書斎で足を伸ばしてゆったりとした状態で、数種類の書類・本等に目を通す。一種類に 5～6 分を費やし、最後に好きな歴史小説のあたりで 30 分経過くらいとなり、瞼が重くなる。そこから 20 ほどの昼寝となる。



祖父への手紙

祖父藤治郎・祖母テルヨ (S33. 2)

その数種の中に両親や祖父母の資料がある。最近、蔵の 2 階にあった父正毅が生前に自分の両親（私から見て父方の祖父母）の手紙などを入れた木箱を見つけた。その中の古い手紙を祖父母に思いを寄せつつ読んだ。宛先はほとんど祖父宛であり、差出人は昔聞いたかもしれないような親戚などの方々である。

ところがその中になんと私が大学 4 年の時に仙台の下宿から祖父に充てた手紙が出てきた。意外に小奇麗な（当時の自分が書いた割には。後日妻も同感とのこと）きちんとした万年筆の字で便箋 2 枚にわたって書かれていた。封書の表には祖父が万年筆で「44 年（昭和）12 月 11 日来信」と記している。今から 52 年前ということになる。

リンゴを送っていただき感謝、早速下宿のおばさんや友達に分けた、お金がピンチ気味なので助かる、来春の就職が岩手県庁に決まりそれまで社会貢献的なサークル活動に精を出している、ただ単位不足で卒業できない

と困るので冬休みには猛勉強するなどのことが書かれている。

祖父母は私にとって生まれながらの家族であり、小学4年くらいまでは祖父母の部屋に祖母、祖父、私の順に並んで寝ていた。父は勤務の関係であまり家にいなかったので祖父は父親のような存在でもあった。あまり意見をしたり、叱ったりということはなかったが、その言動が私の血となり、肉となったものと思われる。

祖父藤治郎は、1898年(明治31年)生まれで、私より丁度50歳上である。父正毅の著書「米寿のあゆみ」(H21.9.14)によると戦後の食糧難時代にあつて米の宝庫である胆沢地方の食糧行政の責任者(農林省岩手食糧事務所水沢支所長・西磐井支所長)を勤め、退職後は江刺市農業委員や地元地区の老人クラブ会長などを勤めている。

1980年(昭和55年)逝去した(享年83歳)。

古い手紙1本が私を半世紀前の祖父のもとに誘ってくれた。

令和3年4月30日 — 偉人と恋心 (第96号) —



項羽と虞美人



虞美人草



玄宗皇帝と楊貴妃

この3月30日付で二つの文章を世に出した。一つはNPO法人いわて未来研会報第44号(R3.4.30)の編集後記においてである。

「司馬遼太郎の『項羽と劉邦』をまた読みました。5度目か6度目です。あれほど強力で勢いのある項羽を何故見るべき才能もない劉邦が破ることができたのか。作家の解釈は、劉邦は多少の愛嬌のある大きな空袋のような人物で、さまざまな才のある人物が自由に動きながら劉邦を助けるように活躍した、一方の項羽は己一人の力・才能に頼り過ぎたところにあった

ようです。(中略)

それにしても、項羽が最期を迎える直前、虞姫（ぐき。虞美人）に対して歌い、別れを告げ、虞姫が理解して舞い納めたところを剣で刺し貫くくだけは涙を誘います。上に虞美人草を掲げます。(相原)」

もう一つは、相原正明行政文化小園 メールマガジン第 106 号(R3.4.30)の前書きに次のように記述した。

「謹啓 青空を背にした海棠は、息を呑む美しさです。中国の玄宗皇帝は、ほろ酔いの楊貴妃を海棠にたとえたといわれ、この故事から海棠は「ねむれる花」とも呼ばれます。」

楊貴妃は玄宗皇帝の寵姫で傾国の美女とも言われる。玄宗皇帝が寵愛しすぎたために安史の乱を引き起こしたと伝えられ、玄宗はその乱の最中、蜀地方に逃れる途中、部下・兵士達に強要される形で泣く泣く楊貴妃に自殺を命じた。

一つの国の運命を握る男性にとって、いかに一人の女性の存在が大きかったかを示す二つの悲話である。

私が二十代に読んだある手記での話である。その男性は名だたる学生運動の闘士であり、リーダーである。公園で大勢の前で得意のアジ演説を始めた。途中で聴衆の中に自分が恋心を抱く一人の女性の姿を見出した。その目を見ているうち、自分が何を話しているか全くわからなくなった。心は既に彼女に占領されていた。

人は強くもあり弱くもある。複雑なようでいて単純である。その中心に男女の恋心があるようだ。人生素晴らしきかな。

令和 3 年 5 月 31 日 — 最期の将軍（第 97 号） —

司馬遼太郎の「最後の将軍—徳川慶喜」の 2 回目を読了した。慶喜公について不思議に思うことは幾つかある。最大のものは何故あっさりと徳川幕府を終わりとし、江戸城を明け渡して降伏してしまったのかということ

である。



徳川慶喜(とくがわよしのぶ)



鳥羽伏見の戦い

鳥羽伏見の戦いで敗れたとはいえ、薩長軍に本気で勝ちにいく準備も心構えも不十分のままの結末であり、本格的戦闘の結果とは言えなかった。相手が官軍の形を取ったといっても、要は勝てば官軍となるのである。

敗軍将兵が続々と慶喜のいる大阪城に入り、慶喜に対し先頭に立つての出陣を求めた。慶喜は大広間でそれに応ずる話をし、満堂歓声を上げた。ところが夜陰に紛れるようにこれら将兵を大阪城に残したまま、軍艦開陽に乗って江戸に帰ってしまった。

もっとも「将軍である以上は断固徳川幕府を守る」という考えを敢えて取り去り、諸外国の圧力に対抗して平和裏に早期に新しい政府を打ち立てるべしとの考えであったとすれば時代の先端を行く識見の持ち主と言えそうである。ただ必ずしもそうは見えない。ひたすらに天皇・朝廷には恭順すべき、薩長軍が官軍である以上は抗すべきではないと考えていたようだ。

慶喜とすればもはや徳川の力は終りに近いとの思いの中で、徳川宗家も将軍職も再三辞退しつつ、やむを得ず引き受けたのであった。未練はもともとなかったかもしれない。

それにしても上に立つ者としての姿勢はどうであったか。こんなこともあった。自ら長州大打込を言い出し、天皇から節刀までいただきながらわずか後に、突如それをやめると言い出し京都政界を呆然とさせた。越前国福井藩主松平春嶽は、当初長州大打込に反対であったが、この一連の動きを指して「徳川三百年にこれほどの愚行をした者もない。つまるところあの人には百の才智があって、ただ一つの胆力もない。」と言った。しかし、慶喜はこの軽薄さについて内々にも悔いず、人に対しても恥じらわなかつ

たという。

もともと武家(水戸家)の出ではあるが、基本的に貴族のような気質に育ち、武家の棟梁には向かなかったように見える。

徳川家の末期的な混乱の中での犠牲者でもあったかもしれない。

ともあれ、歴史にもしもはない。慶喜将軍のお蔭で江戸は火の海とならず、迅速に新しい力を持った明治に進むことができたのは確かである。日本を救うための天の配剤であったかもしれない。

令和 3 年 6 月 30 日 — 史上最大の作戦 (第 98 号) —



映画ポスター



激戦の戦場



歓喜するフランス住民

妻との二人暮らしになって 1 年余となるが、勢力関係の赴くまま、食後の後片付け、食器洗いは私の担当となっている。その作業をしながら見るともなくテレビをつけている。昼食後は、午後 1 時過ぎには後仕舞い作業を終えて 2 階の書斎に戻り、軽読書、短昼寝となる。

ところがここに手違いが生じた。ほとんど見ていないはずのテレビに釘付けとなり、何とテレビを見たまま午後 4 時まで台所に残ってしまい、書類仕事に大きな狂いが生じてしまった。

ともあれ昔一度見たはずの「史上最大の作戦」に大いに感ずるところがあった。

全く眠気も催さずひたすら見入ってしまったのは、そこに人の真心に響くものが随所にあったからだ。共感し同感していた。

一つは、フランスを占領し連合国軍と対峙していたドイツ軍の将軍の常識にのみ捕らわれた判断の甘さとヒトラー独裁体制の脆さである。やは

りそうかという事例でもある。

① 連合軍は天気の良い日にしか攻撃を仕掛けてこない。5月ならともかく6月はないであろう。…独将軍の言葉

② ヒットラーが薬を飲んで寝た以上は、起こして相談などできない。起きたが機嫌が悪くてそれを切り出せない。…現場の軍幹部が戦車部隊の投入を求めたのに対するヒットラー側近の言葉

また、連合軍艦隊による大規模艦砲射撃が始まり、わが家が吹き飛ばされそうになったフランス住民(老男性)が、いよいよ独立解放が始まると小旗を振って狂喜乱舞する映像。

どんなにみじめな状況でも自由独立ほど尊いものはないと共感させた。

もう一つは、ノルマンディーでの上陸作戦の場面。独軍の猛反撃で砂浜に釘付けとなり、次々と戦死者が出る状況の中、ある部下が上官に撤退を進言。それに対してその上官は、「戦死や撤退のために連れてきたのではない。ここにいる兵士は二者択一だ。死か死ぬために前進するかだ。」と述べて部隊全員を奮い立たせた。

戦争は行うべきでないが、現実にはそのような場面になれば、同感できる動きでもあった。

このように随所でごく普通の人間が不慣れな殺し合いを強いられる、そんな理不尽な現実を背景に、人間世界の真実、個人の真心、後の世につなごうという教訓がちりばめられた作品であった。

令和3年7月31日

— 選挙用看板に敬礼 (第99号) —



お別れした選挙用看板(人物は孫2人) 2010(H22)に活用していた様子

盛岡の家に保管していた箆笥の一部を江刺の自宅に移す話が起ったことで、ある意味大騒動となってきた。当然ながら、それらを収めるスペースが必要となるが、実はないのである。母屋も事務所スペース(昔は納屋)も倉も祖父母・父母時代からの由緒ある品々や本・書類の入った段ボール箱などで蟻のはい出る隙間もないように見える。しかし、こういう時こそ選別し、工夫して新たな空間を生み出すべきなのであろう。

手始めは、母屋が一部くびれた形になっているところである。屋根はあるので暴風雨でもない限り濡れない空間であることから、そこに農具など雑多なものを積み上げている。まずここを一部明け、倉のものを移すことから手を付けることとした。

実は、この場所の一番奥に大変なものが眠っていた。私の生涯の大勝負でもあった3回の選挙(2003 江刺市長選、2006 第1回奥州市長選、2010 第2回奥州市長選)で用いた選挙用看板である。選挙の結果は2勝1敗であった。心血を注ぎ、命がけで戦った際の重要な装備である。

戦いが終わった後、本人である私はあいさつ回りや次の持ち場づくりなどで落ち着かない中、こうした荷物はどんどん自宅に運び込まれた。それを整理して片づけてくれた人が当時89歳の父正毅であった。2019年に満98歳で逝去した。改めて深く感謝した次第である。

選挙用看板は選挙用ポスターと並んで自らが政治家であることを世に表明するものでもある。表舞台に飛び出し、たくさんの人々の注目を浴び、逃げも隠れもない状態で政策を競い、人物をアピールし、勝敗を決する。武者で言えば鎧兜の一部であろう。当時はあまり意識しなかったが、振り返ると本当にお世話になったという想いがこみあげてくる。

これら看板を今回、ご縁のある方に何らかの活用を期待しながら、お上げすることにした。

最敬礼して送り出したことであった。

令和3年8月31日

— 西念寺山門の高張提灯（第100号） —



西念寺山門と高張提灯

高張提灯の表(左側)と裏(右側)

お盆の時節に至り我が地域の代表的な寺院西念寺の山門に新しい提灯がお目見えした。白い和紙が目まばゆい一対の高張提灯で、表側に曹洞宗の紋が、裏側に施主の名前が書きこまれている。提灯張りの技術はあの浅草雷門の提灯のそれを取り入れ、書体は靖国神社の諸表示を担っている方の手によるものとのことで(納入業者の説明)、雨が当たっても長持ちするよう撥水加工仕上げとなっている。

なぜこのように詳しいかというと、実は施主が私なのである。具体的にいつからなのかは不明であるが、この提灯の前の施主は父正毅であった。長年お寺の檀家総代を勤めたご縁からかもしれない(ご住職も不詳とのこと)。その父が令和元年末に逝去したことから寺側と相談しようと思い、令和3年に入って私の方から加藤隆喜和尚に相談したのであった。

結果は、引き続き私の家で提灯の施主となり、新しいものを和尚さんから業者に発注することになった。

7月には提灯納品となり、8月のお盆の時期から山門に吊るされ、夕刻には電気による明かりが灯ることになった。

やれやれこれで一件落着と思い、しばらくして自宅で父の古い書箱を覗いた時であった。当該山門の平成19年10月28日の落慶式の奥州市長名の祝辞文が出てきたのだ。

「(前略)当山は、その草創の歴史は古くこの地方の仏教文化の伝統を伝える中心地でもあります。承れば、山門はその由来や建立年は不詳で、老

朽化の一途をたどり危険な状態にあったとのことであります。

このことを受けて改修のことが企画されるや、ご住職のご尽力と檀信徒の熱意と協力により浄財も積もり、また、建築設計に当たっては、当山の歴史に鑑み、薬医門形式を導入して優美さを生かし、堅牢な材質を以て施工し完成されました。(中略)平成 19 年 10 月 28 日奥州市長相原正明」

当時の手帳を見たらこの祝賀行事のことは書いてあったが、私自身は他用務に向かい、本行事の方は代理出席(祝辞代読)となったようであった。

この山門とはご縁で結ばれていたようであり、山門に添える花のような高張提灯の施主となることも自然な流れであったかもしれない。

メールマガジン

初代奥州市長(2 年目)メールマガジン

★ 相原正明行政文化小園メールマガジン第 28 号(H19.4.30) ★

— 問題・困難が新たな道を拓く —

拝啓 桜花爛漫のときが過ぎ、風薫る瑞々しい五月を迎えようとしておりますが、お変わりありませんか。

メルマガ第 28 号をお届け致します。



今年も奥州市の代表的な春の祭り、水沢区の日高火防祭(ひたかひぶせまつり)が絢爛豪華に行なわれた。金、朱、碧色と色とりどりに彩色された、美しいやし屋台 9 台が、三味線・小太鼓・笛の計 23~28 人の着飾った少女(お人形さんと呼ばれる)・娘を乗せ、町内を練り歩く。闇夜に浮かび上がった光景に思わず、息を呑む。